

課題

- ① 平家物語について、基礎的な知識を身に付けよう。
- ② 木曾義仲の心情を読み取ろう。

●平家物語について空欄を埋めなさい。(教科書を参考にしても良い)

■ 成立・作者

() () 時代前期ごろまでに成立したとされる。作者は () ()。
書き写されて広まっただけではなく、() が琵琶という楽器を弾きながら
語る () () として広く民間に伝えられた。

■ 内容・形式

() () を栄華の頂点として、() () に敗れ、滅亡していく平家の姿
を、() () () () の道理のもとに語る。
() () がある。
数多くの異本があり、平曲の口承による () () と、文献による読み物としての

■ 冒頭

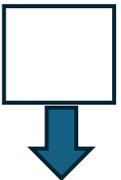
祇園精舎の鐘の () ()、諸行無常の () () あり。
沙羅双樹の花の () ()、盛者必衰の () () をあらはす。
驕れる () () も久しからず、ただ春の夜の () () のごとし。
猛き者もつひにはほろびぬ、ひとへに風の前の () () に同じ。

※時間が余ればこの冒頭の暗唱テストをやりませう

● 「木曾の最期」について

導入部の話聞き、自分が京都にいる木曾義仲だったら、どのように行動するか
考えてみよう。

- ア・東に逃げ、兼平と合流する
- イ・敵のいない北に逃げる
- ウ・京都に残る
- エ・その他



理由

平家物語 木曾の最期 授業プリント②

課題

- ① 第一段落をリズムよく音読しよう。
- ② 二人の会話を適切に読み取り、二人の心情について考え、整理しよう。

問 次の歴史的仮名遣いの言葉を、現代仮名遣いに直せ。

1. のたまひ () 2. いふかひなき ()

問 次の語句の意味を答えよ。

1. のたまふ () 2. 日ごろ ()
3. おぼゆ () 4. 候ふ ()
5. おぼしめす () 6. さ ()
7. 口惜し ()

問 次の空欄を埋めて、本文と現代語訳を完成させよ。

今井四郎・木曾殿が、主従二騎になって ()

() ことには、

① 今井四郎・木曾殿、主従二騎になって のたまひけるは、

「日ごろは ()

() 鎧が、今日は重くなったぞ。」

今井四郎が申し上げたことには、

② 「日ごろはなにもおぼえぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや。」今井四郎申しけるは、

「お身体もまだ疲れていらっしやいません。お馬も弱ってはおりません。

」

」。

③ 「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず。なにによつてか一両の御着背長を重うはおぼしめし候ふべき。

発展

②について、義仲はなぜ鎧が重く感じられたのか、その理由を記述せよ。

知識

「係り結び」を知ろう

五つの助詞「ぞ・なむ・や・か・こそ」を使うと、その上の語句を『強調』したり、『疑問・反語』にしたりできます。この五つの助詞を使った文は、終わり方をいつもと変えなければいけません。これが「係り結び」です。

A 「ぞ」がついている語句は『強調』(強く言うこと)されます。

普通の言い方

扇は空へ上がりけり。

係り結び

扇は空へぞ上がり()。

B 「なむ」がついている語句は『強調』されます。

普通の言い方

さぬきのみやつこと言ひけり。

係り結び

さぬきのみやつことなむ言ひ()。

C 「や」がついている文は『疑問・反語』の意味になります。

※「反語」とは…文を、あえて疑問文のような形にして、文全体を強調する。

普通の言い方

花なき里に住みならへり

係り結び

花なき里に住みやなら()。(花が咲かない里に住み慣れているのか。)

D 「か」がついている文は『疑問・反語』の意味になります。

普通の言い方

いづれ歌をよまざりけり。

係り結び

いづれか歌をよまざり()。(誰が歌をよまないだろうか。いや、皆よむ。)

E 「こそ」がついている語句は『強調』されますが、「ぞ・なむ」とは終わり方が違います。

普通の言い方

尊くおはしけり。

係り結び

尊くこそおはし()。

終わり方がと違うことに注目!

「ぞ・なむ・や・か」は文末が() 形になり、

「こそ」は文末が() 形になることを知っておこう。

教材文にある「係り結び」に着目し、その意味に気を付けながら音読しましょう。

それは味方に軍勢がありませんので、気後れから」
兼平一人のお仕えであっても、他の武者千騎とお思いください。
「お思いになるのです。」

④それは御方に御勢が候はねば、臆病でこそさはおぼしめし候へ。
兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。

矢が七本八本ございますので、しばらく防ぎ矢をいたしましょう。あそこに見えますのは、粟津の松原と申します。あの松原の中で自害なさいませ。」と言って、馬に鞭を打って行くうちに、

⑤矢七つ八つ候へば、しばらく防ぎ矢仕らん。あれに見え候ふ、粟津の松原と申す。あの松の中で御自害候へ。」とて、打って行くほどに、

また新手の武者が五十騎ほど出てきた。「殿はあの松原へお入りください。兼平はこの敵を防ぎましょう。」と申し上げたところ、木曾殿がおっしゃったことには、

⑥また新手の武者五十騎ばかり出できたり。「君はあの松原へ入らせ給へ。
兼平はこの敵防ぎ候はん。」と申しければ、木曾殿のたまひけるは、

「義仲は都でどうにでもなるはずだったが、ここまで逃げてきたのは、
」
「と思うためである。」

⑦「義仲都にていかにもなるべかりつるが、これまで逃れくるは、汝と一所で死なんと思ふためなり。」

別々の場所で討たれるよりも、」
馬の鼻を並べて駆け出そうとなさるので、
「。」と言っている。

⑧「どこでどこで討たれんよりも、ひとところでこそ討ち死にをもせめ。」とて、
馬の鼻を並べて駆けんとし給へば、

問 ④の「さ」の具体的内容が書いてある箇所を、段落番号で答えよ。

問 ④と⑧の中で、係り結びがある場所に傍線を引け。

問 ⑦の「いかにもなるべかりつる」は、具体的にどうなることを述べているか。
選択肢から2つ選べ。

- ア. 討ち死にすること
- イ. 相手を打ち破ること
- ウ. 出家すること
- エ. 背を向けて逃げること
- オ. 自害すること

発展 係り結びが使われた文から、係り結びを消して書き直してみよう。

--	--

今井四郎は馬から飛び降り、主君の馬の口に取りついて申し上げたことには、

⑨今井四郎馬より飛び降り、主の馬の口に取りついて申しけるは、

「武士は、長年、常日頃どのような名声がございましたも、最後のとき不覚を取ってしまったと、
」。

⑩「弓矢とりは、年ごろ、日ごろいかなる高名候へども、最後の時不覚しつれば、ながき疵にて候ふなり。」

お体は疲れていらつしやいます。続く軍勢はございません。敵に（二人の間を）無理に隔てられ、

「者の家来に組み落とされなさって、討たれてしまわれたならば、

⑪御身は疲れさせ給ひて候ふ。続く勢は候はず。敵に押しへだてられ、いふかひなき人の郎等に組み落とされさせ給ひて、討たれさせ給ひなば、

『あれほど日本（中）で評判でいらつしやつた木曾殿を、だれその家来が討ち申した』などと申すようなことこそ」 「でございます。今はただあの松原へお入りください。」

⑫『さばかり日本国に聞こえさせ給ひつる木曾殿をば、それがしが郎等の討ちたてまつたる』
なんと申さんことこそ口惜しう候へ。ただあの松原へ入らせ給へ。」

と申し上げたので、木曾殿は、「」 「。」と云って、粟津の松原へ馬を走らせなさる。

⑬と申しければ、木曾、「さらば。」とて、粟津の松原へぞ駆け給ふ。

知識 二重敬語を知ろう

普通の言葉 疲れて候ふ（疲れています）

敬語① 疲れさせて候ふ（疲れていらつしやいます）

敬語② 疲れ給ひて候ふ（疲れていらつしやいます）

敬語①+② 疲れさせ給ひて候ふ（疲れていらつしやいます）

※物語の中でも特に身分が高い人物に対して使われる表現です。今回は義仲にのみ使われます。このページ⑨～⑬の範囲で二重敬語を探して、線を引いてみましょう。

問 ⑪「御身は疲れさせ給ひて候ふ」と正反対のことを述べている箇所を抜き出せ。

発展 なぜ兼平は、前後で発言の内容が変わったのか。あなたの考えを記述しなさい。

平家物語 木曾の最期 授業プリント③

課題

- ① 第二段落をリズムよく音読しよう。
- ② 今井兼平の人物像を読み取ろう。

問 次の漢字の本文中の読みを答えよ。

- ア. 鐙 () イ. 乳母子 ()
- ウ. 大音声 () エ. 面 ()

問 次の語句の意味を答えよ。

- ア. 音 () イ. さる ()
- ウ. しろしめす () エ. 手 ()

問 次の空欄を埋めて、本文と現代語訳を完成させよ。

今井四郎はただ一騎、五十騎ほどの（敵の）中に駆け入り、鐙をふんばって立ち上がり、大声をあげて名のつたことには、

⑭ 今井四郎ただ一騎、五十騎ばかりが中へ駆け入り、鐙ふんばり立ちあがり、大音声あげて名のりけるは、

「ふだんはきつと」 () 「でも聞いているであろう、今はその目でご覧あれ。（私は）木曾殿の御乳母子、今井四郎兼平、年は三十三歳になり申す。そのような者がいるとは鎌倉殿までも」 () 「だろ
うよ。兼平を討ち取って（首を鎌倉殿に）ご覧に入れよ。」と言って

⑮ 「日ごろは音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。木曾殿の御乳母子、今井四郎兼平、生年三十三にまかりなる。さるものありとは鎌倉殿までもしろしめされたるらんぞ。兼平討つて見参にいれよ。」とつ

問 「さるもの」とは具体的に誰を指しているか。人物名で答えよ。

問 「鎌倉殿」とは具体的に誰を指しているか。人物名で答えよ。

発展 ここで、義仲の名乗りと比べてみよう。

「昔は聞きけん物を、木曾の冠者、今は見るらん、左馬頭兼伊予守、朝日の將軍、源義仲ぞや」
甲斐の一条次郎とこそ聞け。たがひによいかたきぞ。義仲討つて兵衛佐に見せよや」

とても似ているが、違うところもある。中でも注目するべきは、兼平は () () を使っているが、義仲は使っていないところだ。例え敵であっても、相手との身分関係をわきまえることが武士の礼儀だったのである。

※ヒント ⑮の網掛け部分

射残していた八本の矢を、弓に次々につがえては引き、激しく射る。死んだか生きているかはわからないが、⁷たちまち敵を八騎射落とす。その後刀を抜いて、あちらに馬を走らせて戦い、こちらに馬を走らせて戦い斬つて回るが、¹

¹。敵を討ち取ることを数多くしたのだった。

⑩射残したる八筋の矢を、差しつめ引きつめさんざんに射る。死生は知らず、やにはに敵八騎射落とす。その後打物抜いて、あれに馳せ合ひ、これに馳せ合ひ切つてまはるに、面を合はするものぞなき。分どりあまたしたりけり。

(敵は)ただ、「射殺せ。」と言って、中に取り囲んで、雨が降るように(矢を)射たが、鎧がいいので(矢が)鎧の裏側まで貫通せず、¹

¹。

⑪ただ、「射とれや。」とて、中に取り込み、雨の降るやうに射けれども、鎧よければ裏かかず、空き間を射ねば手も負はず。

問 「面を合はするものぞなき」について、次の2つの問いに答えよ。

1. 係り結びを消して書き直せ。

2. 理由として適切なものを、選択肢から選べ。

- ア. 兼平が周辺にいる敵のほとんどを倒してしまったから
- イ. 義仲を追討するために、多くの敵がその場を離れたから
- ウ. 兼平のあまりの強さに敵が恐れをなしたから
- エ. 鎌倉殿にいくさの報告をしに行ったから

平家物語 木曾の最期 授業プリント④

課題

- ① 第三段落をリズムよく音読しよう。
- ② 物語の流れを正確に読み取り、登場人物の心情を読み取ろう。

問 次の漢字の本文中の読みを現代仮名遣いで答えよ。

- ア. 入相 () イ. 真甲 ()
- ウ. 太刀 () エ. 庇はん ()

問 「おぼつかなし」の意味は次の3つである。この中で、今回の訳に最も適切なものを選び。

- ① はっきりしない、あいまいだ
- ② 不安だ、気がかりだ
- ③ 待ち遠しい

問 次の空欄を埋めて、本文と現代語訳を完成させよ。



木曾殿はただ一騎で、粟津の松原へ馬を走らせなさんと、正月二十一日の、夕暮れ時のことである上に、薄氷が張っていた(ので)、深田があるともわからないで、馬をぎんぶと乗り入れたので、(深く田に沈んで)馬の頭も見えなくなった。

⑱ 木曾殿はただ一騎、粟津の松原へ駆け給ふが、正月二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり、深田ありとも知らずして、馬をぎつとうち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。

あおってもあおっても、(鞭で)打っても打っても動かない。

「、振り返って仰ぎ見なされた甲の内側を、三浦の石田次郎為久が、追いついて、(弓を)よく引き絞ってひょうふつと射る。

⑲ あふれどもあふれども、打てども打てども働かず。今井が行方のおぼつかなぎに、振り仰ぎ給へる内甲を、三浦石田次郎為久、追つかかつて、よつ引いてひやうふつと射る。

問 「振り仰ぎ給へる」について、『誰』が『誰』の行方を気にして振り返ったのか。

人物名をそれぞれ答えよ。

() (が) (の) 行方を気にして振り返った。

知識 『音便』について知ろう

	元の形	変化後
イ音便	発音が「い」になる現象。	例) 書きて ↓ 書いて
ウ音便	発音が「う」になる現象。	例) 言いて ↓ 言うて
撥音便	発音が「ん」になる現象。	例) 死にて ↓ 死んで
促音便	発音が「つ」になる現象。	例) 討ちて ↓ 討って

発展 音便化した次の語句を、元の形に直せ

- ア. 張って () イ. 追って () ウ. 引いて ()

問 ②①の「聞こえ」は「聞こゆ」という動詞の連用形であるが、その意味は次の4つである。

9

この中で、今回の訳に最も適切なものを選び。

- ①聞こえる ②評判である ③理解できる ④申し上げる



(矢が命中し) 深い傷なので、甲の前面部を馬の頭に当てて、うつ伏しなされたところに、石田の家来二人が来合わせて、とうとう木曾殿の首を取ってしまった。

②0痛手なれば、真甲を馬の頭に当てて、うつぶし給へるところに、石田が郎等二人落ち合せて、つひに木曾殿の首をば取つてんげり。

(首を) 太刀の先に貫いて、高く差し上げ、大声をあげて、「この常日ごろ日本国で

「木曾殿を、三浦の石田次郎為久がお討ち申したぞ。」と名のったので、

②1太刀の先に貫き、高く差し上げ、大音声をあげて、「この日ごろ日本国に聞こえさせ給ひつる木曾殿をば、三浦石田次郎為久が討ちたてまつたるぞや。」と名のりければ、

今井四郎は戦っていたが、これを聞いて、「今となっては、誰をかばおうとして、いくさをしようか、いや、するつもりはない。これをご覧なさい、東国の殿たち、日本一の剛勇者が自害する手本だ。」と言って、太刀の先を口に含み、馬から逆さまに飛び落ちて、(太刀に) 貫かれて」。

②2今井四郎いくさしけるが、これを聞き、「今はたれを庇はんとてか、いくさをもすべき。これを見給へ、東国の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本。」とて、太刀の先を口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。

そういうわけで粟津のいくさは終わったのである。

②3さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。

問 ②②「いまはたれを庇はんとてか、いくさをもすべき」について、この時の兼平の心情の説明として、最も適切なものを選択肢から選べ。

- ア. 自身の無力さを痛感し、戦をする気力をなくしている。
イ. 思い通りにならないこの世界の無常を感じ、あぜんとしている。
ウ. 奮戦する目的をなくし、家臣として見事な最期を遂げようとしている。
エ. 家臣として生きる意味をなくし、自暴自棄になっている。

発展

木曾義仲と今井兼平。二人の人物に対して、あなたが抱いた感想を自由に記述しなさい。

課題

スポンサーの言いなり脚本家となって、特定のキャラクターを格好良く描こう。

◆活動① 誰を物語の主役にする？ 格好良く描くキャラクターを決めよう！

- ア 木曾義仲
- イ 今井兼平
- ウ 石田為久
- エ 巴御前
- ウ その他・オリジナル



◆活動② アイディアを自由に連想しよう！

メモ（空白でも可）

◆活動③ 生成AIの力を借り、脚本を作ろう！

Teams を開き、指示に従って生成AIを利用しましょう。
最初のプロンプト（生成AIへの命令）は

「今から出す指示に従って、平家物語の木曾の最期の脚本を書き直して」
とでもしましょう。

（おそらく無茶苦茶なものができます。しっかり指示して、理想の脚本を作り上げましょう。）

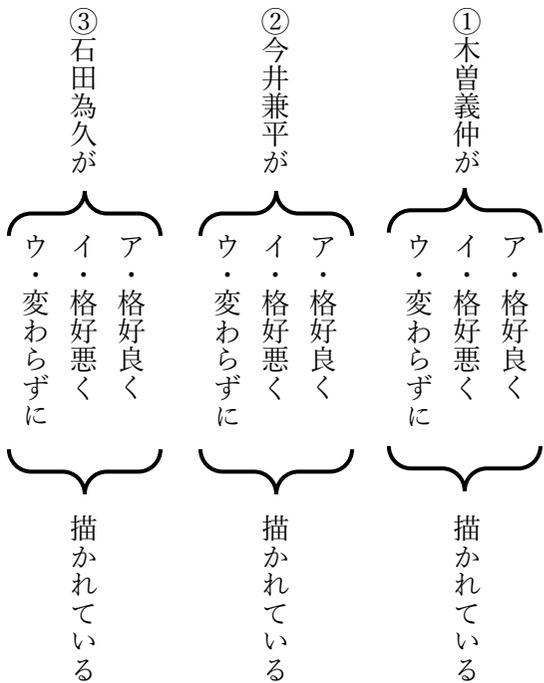
◆活動④ 他人の作品を読んで、「この主人公、格好良く描けてる！」と思うものを選びよう！

（誰の作品が良かった？ 作者の名前を書こう。何人選んでも良い）

課題

教科書バージョンの「平家物語」と、別バージョンの「平家物語」を比べて、人物の描かれ方の違いを見つけよう。

別バージョンの平家物語は、教科書バージョンと比べて、各人物の描かれ方は？



シーン① 冒頭の会話〜一度目の説得を試みる兼平

「さていかに。例ならず義仲が鎧の重くなるは、いかがせむ」。

今井涙を流して、「未だ御身もつかれても見えさせ給はず。御馬も未だよわり候はず。何故にか、今始めて一両の御着背長をば重くは思し召され候ふべき。ただ御方に勢の候はぬ時に、憶してぼしぞおぼしめされ候ふらむ。兼平一人をば、余の武者千騎とおぼしめせ。あの松原、五町ばかりにはよもすぎ候はじ(五町ごまちも離れていないでしょう)。松原へ入らせおはしませ。矢、七つ八つ射残して候へば、しばらく防ぎ矢仕りて、御自害なりとも心閑かにせさせ奉らせ、御共仕らむ(心静かに最期を迎えられるようお手伝いし、おそばにお仕えいたします)。」とて、大津の東の川原、粟津の松をさしてぞ馳せける。大勢、未だ追ひ付かず。

勢多(川)の方より、新手の者共五十騎ばかりにて出で来たり。今井申しけるは、「君は松の中へ入らせ給へ。兼平は此の敵に打ち向かひて、死なば死に、死なずば返り参らむ(死ぬならばここで死に、死なずには戻って参りましょう)。兼平が行くへを御覧じはてて、御自害せさせ給へ(兼平の行く未を「覧」になつてから、どうするか「自害」を待たせてください)。」とぞ申しける。

メモ欄

気づいたことをメモしよう

教科書

『寛一本』

に属する

別バージョン

『延慶本』

に属する

シーン②

ともに討ち死にしようとする義仲に、二度目の説得を試みる兼平

「年ごろ日ごろいかなる高名をしつれども、最後の時に不覚しつれば、長き代の疵にて候ふぞ。いふかひなき奴原に打ち落とされて、『木曾殿は某が下人に打たれ給ふ』など、言はれさせ給はむ事こそ口惜しけれ。ただ松の中へとくどく入り給へ」

シーン③

木曾義仲が深田にはまって討取られる場面

比は正月二十一日の事なれば、粟津の下の横なわたの、馬の頭もうづもるほどの深田に薄氷のはりたりけるを、馳せ渡りければ、なじかはたまるべき(どうして耐えられようか、いや耐えられない)、馬の太腹まで馳せ入りたり。馬も弱りて働かず。主も疲れて身もひかず。「さりとて今井はつづくらむ(それでも今井はこちらに戻ってくるだろう)」と思ひて後ろを見返りたりけるを、相模国住人、石田小太郎為久、よく引いてひやうど射たりければ、木曾が内甲を矢さきみえてぞ射出だしたりける(内甲を、矢の先が見えるほど深く射通した)。しばしもたまらず(少しの間も耐えられず)、真甲を馬の頭にあててうつぶしたりけるを、石田の郎等二人、馬より飛び下り、俗衣をかき(俗人の衣(武士の戦装束ではない衣)をたくしあげ)、深田に下りて木曾が頸ぐび(首)をばかきてけり。

シーン④

兼平が自害する場面

「木曾打たれぬ」と聞きて馳せ来たり、「吾がきみを打ち奉る人は誰人ぞや。其の名を聞かばや(聞きたい)」と語りけれども、名乗る者なかりけり。「軍(いくさ)しても今はなににかせむ(どうしようか、いや、どうしようもない)」とて、「日本第一の剛の者の、主の御共に自害する。八ヶ国(東国)の殿ばら、見習ひ給へ」とて、高き所に打ちあがり、大刀を抜きてきさきを口にくわへて、馬より逆に落ちて、つらぬかれてぞ死ににける。大刀のきさき、二尺(約60cm)ばかり後ろへぞいでにける。今井自害して後ぞ、粟津の軍は止まりける。

追加シーン①

松原を目指す義仲を、石田為久が追いかけている。

ここに相模国の住人、石田小太郎為久という者、追ひかかり奉りて、「大將軍とこそ見奉り候へ。まさなしや、源氏の名折りに。返し給へ(見苦しいぞ、源氏の名折れだ。引き返せ)」と言ひければ、木曾、射残したる矢の一つあるを取りて、つがひておしもちりて、馬の上よりひやうど射る。石田が馬の太腹を射たてたりければ、石田、ま逆に落ちにけり。

◆まとめ 別バージョン（延慶本）の作者の意図を汲み取る。

追加シーン② 教科書にはない場面

すべてを語り終えた後、語り手が義仲に対してコメントをする。

義仲も先づ都へ入ると云へども、其を慎しみて頼朝が下知を待たましかば、沛公が謀には劣らざらまし物をと哀れ也。義仲、悪事を好みて天命に従はず。剩あまつさへ法皇を徧(さみ)し奉りて叛逆に及ぶ。積悪の余殃よおう身に積りて、首を京都に伝ふ。前業ぜんごうのつたなき事をはかられて無慚也。

何なる者かしたりけむ、札に書きて立てたりけり。

宇治川を水づけにしてかきわたる木曾の御れうは九郎判官

田畠(たはたけ)のつくりものみなかりくひて木曾の御れうはたえはてにけり

名にたかき木曾の御れうはこぼれにきよしなかなかに犬にくれなむ

木曾が世に有りし時は、「木曾の御料」と云ひてしかば、草木も靡(なび)きてこそ有りしに、いつしか天下の口遊(くちずさび)に及べり。はかなき世の習いと云ひながら、とがむべき人もなし。日来振る舞ひし不善不当、自業自得果の理なれば、とかく申すに及ばず。

別バージョン（延慶本）の語り手は、明らかに

描こうとしている。

では、教科書バージョン（寛一本）の語り手は？ どんな意図をもって物語を描いたのか？

(あくまで推測でしかないが……)

別バージョン（延慶本）が『読み本』（本を書き写して広まってきた）であるのに対して、

教科書バージョン（寛一本）は『語り本』（琵琶法師が歌い継いで広まった）である。

そして琵琶法師は、歌によって（ ）をもらっていた。ということは、

教科書バージョン（寛一本）の語り手（琵琶法師）は

描こうとしていたのではないか。

◆振り返り

観点① 自分の意図に沿った「平家物語」を作ることができたか。

ア 完璧にできた イ まあまあできた ウ あまりできなかった

観点② 教科書に載っている「平家物語」の作者の意図を読み取ることができたか。

ア 深く読み取れた イ ある程度理解できた ウ あまり分からなかった

授業を受けた感想を記述しなさい。